《書評》

『京都を学ぶ【宇治編】：文化資源を発掘する』

京都学研究会編*、ナカニシヤ出版、2023 年

徳　満　　悠†

Ⅰ．はじめに

本書は京都府立京都学･歴彩館と京都府内の大学･研究機関で実施している「京都の文化資源」共同研究プロジェクトの成果である。本プロジェクトは平成 27（2015）年度から開始され、これまでに洛北・丹波・南山城・洛西・洛東・伏見・宇治・丹後の 8 地域を対象に共同研究が行われている。

本プロジェクトの web ページによると、それぞれの地域に対して 3 年間を 1 タームとする研究期間が設けられ、1 年目に研究、2 年目に成果報告と出版、3 年目に講座やセミナーでの研究発表を実施する。本書のテーマである宇治は令和 3（2021）年度から開始されたタームであり、令和 5 年度までが一区切りということになる。プロジェクトについてはのちに触れるとして、まずは本書の構成･概要を確認する。なお行論の都合上、ローマ数字が冠されたまとまりを章として扱い、Ⅰ章、Ⅱ章のように呼ぶ。

Ⅱ．本書の構成・概要

先に述べたように、本書は共同研究プロジェクトの研究成果を出版したものである。ゆえにいわゆるオムニバス形式を採っており、全ての論考について詳しく説明を加えることは紙幅の制約上困難である。そこでまずは本書の構成を紹介し、その後内容をみてゆきたい。

Ⅰ　宇治橋・宇治川・宇治別業
八世紀の宇治（金田章裕）
平安時代の宇治と藤原氏別業（杉本宏）
コラム 1　平等院が表現する極楽浄土の景観（杉本宏）
宇治を描く――『源氏物語』・歌枕・名所図（家塚智子）
コラム 2　変化する宇治の橋姫（家塚智子）
Ⅱ　中・近世の宇治と巨椋神社
中世後期の宇治・宇治田原――戦乱・都市・城郭（川口成人）
コラム 3　宇治の合戦（森下衛）
絵図から眺める近世宇治郷（上杉和央）

---

* 京都学研究会（立命館大学教員：川口成人　衣笠総合研究機構専門研究員）

† 福井県立若狭歴史博物館学芸員

© 立命館大学アジア・日本研究所
『立命館アジア・日本研究学術年報』2024, PRINT ISSN 2435-421X ONLINE ISSN 2435-4228, Vol.5, pp.117-119.

巨椋神社本殿の建築史――史料・意匠・工匠（中西大輔）
Ⅲ　宇治茶と茶業景観
ひとつの宇治茶業史――濃茶・薄茶と煎茶（坂本博司）
コラム４　上林松壽――花を愛した宇治の茶師（坂本博司）
中宇治の町と町家（清水重敦）
Ⅳ　宇治茶の諸相と宇治の民俗行事
宇治茶をめぐる三つの元素の物語（藤井孝夫）
コラム５　普茶料理（佐藤洋一郎）
宇治のまちの文化資源の持続性――コロナ禍における地域民俗行事から考える（森正美）

本書では概ね扱う時代の順番に論考が並び、それらを大きくまとめる形で章タイトルが付されている。各論考に細かな順番が与えられていないのは、どこから読んでもよい、つまり読者の興味に従って読めばよいという配慮であろうか。

前半の２章には古代・中近世の宇治を様々な視点から分析した論考・コラムが並ぶ。その中でも宇治橋や宇治の都市性について扱った論考が多く並ぶが、ここでは評者の関心から上杉論文に触れておきたい。

上杉論文では宇治に残された絵図の中でもひときわ詳細な情報を持つ「宇治郷総絵図」と、それを細分化した「宇治郷切絵図」を素材とする。いずれの絵図も大きく、かつ詳細に描き込まれているため得られる情報は多い。上杉はそうした情報を建築物（屋敷）、畑、寺社、山川といったいくつかの観点から分析することで、当時の宇治郷の景観復元を試みている。都市宇治の姿に加えて、どのように絵図を読み景観を復元してゆくのかという、景観復元そのもののプロセス、あるいは考え方をも学ぶことができるだろう。また一般的な「宇治」の範囲から外れてしまうことの多い宇治田原を扱った川口論文も、宇治を多角的に分析した本書ならではの論考といえるだろう。

一方、後半の２章では宇治茶を中心とした論考が編まれている。宇治といえば茶、というイメージは一般に共有されたものだろう。とりわけⅢ章の坂本論文は茶師の実態から製茶の過程までを幅広く扱っており、近世以降の宇治茶をめぐる状況を概観するには好適の論考である。チャの生産を科学的に考察した藤井論文、現代の文化資源を考察した森論文、普茶料理を扱った佐藤論文が含まれるⅣ章も興味深いが、どこか「分類しにくい論考をまとめた」印象を受けるのは評者だけであろうか。それぞれが興味深い内容を持つだけに、やや惜しまれる。

以上、コラムを含めて15本の論考が掲載されているが、いずれも比較的短く読みやすい。この点も一般向けという本書の性格が表れているといえよう。

Ⅲ．本書の持つ意義

先に紹介したとおり、本書では宇治橋の架橋や別業都市の成立といった古代から、宇治郷としてのまとまりが産まれる中世、そして茶業を軸に都市が成長する近世・近代と、時代を追いながら宇治の歴史を学ぶことができる。また、宇治という語から真っ先に連想されるであろう「茶」の歴史にも触れており、まさに宇治全体を学ぶための書籍といえる。加えて、それぞれの論考は各研究分野で第一線に立つ研究者によるものであり、最新の成果がふんだんに盛り込まれている点も貴重である。

本シリーズは「わかりやすい学術書」を目指したとされる。本書に限らずシリーズ全体を通して史料引用なども極力抑えられているので、専門の研究者ではない読者でもとっつきやすく読みやすいだろう（史料を排除することが読みやすさに繋がるという考え方は問題だが）。まさに研究成果の「エッセンス」であり、ターム内で実施されるという一般向けセミナーと併せて、本研究プロジェクトの成果発信に寄与しているものと思われる。もちろん、専門的に学びたいという意欲ある読者は研究報告書にたどり着くはずである。

ところで、本書の副題にもなっている「文化資源を発掘する」とはどういう意味であろうか。この「文化資源」という言葉は、シリーズ第１巻である洛北編で解説されている。それによると文化資源とは「文化財･文化遺産の範囲を超えた文化全般を対象としたもの」であり、つまりそれは「地域の生活文化に含まれる事象を広く意味するもの」と理解されるという（金田, 2016: 30-31）。金田は「必ずしも良く知られていないこの地域〔洛北地域：評者注〕の文化資源の貴重な側面を紹介している」とも述べており、著名な観光地が林立する京都において、より生活に根ざしながらも知られていない文化を「発掘」し、伝えてゆくという意識があるものと思われる。「稼げる文化財」などといわれる昨今、京都という場でこうした研究が行われることには大きな意味があるだろう。

一方、金田は「本書で取り上げた事象は、宇治の文化資源のごくわずかな例でしかない」ことも指摘している（これは各シリーズ共通のようだ）。実際には「発掘」できなかったり、本文で取り上げられなかったりした文化資源も多くあるものと思われる。そういったより小さな文化資源、不可視の文化資源をどのように「発掘」し、継承してゆくのかという問題は常につきまとうだろう。この問題はプロジェクトに携わる研究者だけでなく、京都を研究する研究者、そして市民もが考えなくてはならない問題かもしれない。もちろん京都に限らず、全国各地で考えてゆかなくてはならない問題なのだが。

やや冗長になってしまったが、本書（また本シリーズ）の意義は第一に「京都の文化資源」共同研究プロジェクトの成果をわかりやすく、手に取りやすく発信していること、第二に「文化資源」という概念のもと、対象地域の歴史・文化を幅広く紹介していること、この２点に集約されるといっても過言ではないものと考える。もちろん、各論考で呈示される研究成果が貴重なものであることは間違いない。それでも本書の性格を鑑みるに、この２点を同時に、かつ高度なレベルで達成していることこそ重要なのだと評者には思われる。研究プロジェクトは今後も継続され、続刊が予定されているとも聞く。京都府下の各地域で「発掘」が進み、京都研究に一層の厚みがもたらされることを願ってやまない。

なお評者の興味・関心に引き付けての書評となり、編者および著者一同の意図をどこまで汲み取ることができているか一抹の不安は残る。至らぬ点は御海容願いたい。また読者諸氏はぜひ本書を一度手に取り、文化資源「発掘」に参加していただきたい。

参照文献

金田章裕（2016）「洛北の名所」京都学研究会編『京都を学ぶ【洛北編】――文化資源を発掘する』ナカニシヤ出版.